



京都大学女性研究者支援センター
Center for Women Researchers

夏休み キッズ サイエンス スクール

8月20日(月)から24日(金)の5日間、女性研究者が研究・教育に十分な時間をとることができるような施策の一つとして、「夏休みキッズ サイエンス スクール」を開催しました。この企画のもう一つの目的は、子ども達が自然科学に興味をもち、将来、研究者になりたいという気持ちを抱かせることです。対象は、小学校1年生から3年生の子どもです。多数の応募があり、参加者を抽選することとなりました。

スクールの1日は、午前が保育士による課題設定活動で、午後が科学教室です。合間には、自由遊びや昼食、おやつがあります。1日の最後には、絵日記と、科学教室でお世話になった先生への手紙を書きました。

<1日目>

はじめに、塩田浩平センター長より、開校の挨拶がありました。初日ということで、少し緊張気みの子どもたちでしたが、先生の紹介、スクールの約束事の説明を聞き、子どもたちの自己紹介へと移るころには、質問をするなど活発になってきました。そしてセンター探検を行い、トイレの場所、入ってはいけない部屋の説明を聞きました。



午前の活動は「紙ねんどで遊ぶ」です。工作よりおしゃべりが楽しい子、熱中して作っている子などさまざまですが、ビー玉やカラービーズを使って飾り付けをするなど素敵な作品ができました。

午後からは、工学研究科の北野先生による「光で遊ぼう」の時間でした。光の説明をしていただいたあと、CDを使って分光器を作りました。まわりに絵を描いた自分の分光器で太陽光や蛍光灯、電球、その他いろいろな光源を使った光を当てて、プリズムを楽しみました。



<2日目>

朝の挨拶のあと、赤・青・黄の3つの班に分かれて「なぞなぞ」を考えました。各グループ内で、意見交換ができるようになったところで終了し、昨日作った粘土細工に絵の具で色づけをしました。色だらけの手になりましたが、集中している間はとても静かでした。

昼食後、学術情報メディアセンターに移動しました。喜多先生、元木先生、コンテンツ作成室の方々に教えていただいて、バーチャルスタジオにてクロマキー合成ビデオを作成しました。撮影係、美術係、俳優の3チームに分かれ、力を合わせてオリジナルビデオを作りました。それぞれの持ち場を頑張る子どもたちでした。

<3日目>

こおり、かきこおり、カルピスソーダの3グループに分かれ、ちぎり絵で飾った「うちわ」を作りました。早く終わった子どもから自由遊びを始めます。3日目ともなると、何事も慣れてきた様子です。空き時間には、昨日の粘土細工の仕上げをしたりしていました。

午後は、農学研究科の那須田先生の指導のもと、果実のスケッチや花あてカルタを楽しんだ後、虫眼鏡や実体顕微鏡で花や実を観察しました。実体顕微鏡で見たときは、大喜びでした。



センターからの
お知らせ

◆シンポジウム

日時：平成19年11月7日(水) 16:30~19:00

場所：芝蘭会館 稲盛ホール

講演者：Dr. Phoebe S. Leboy (AWIS)

坂東昌子(愛知大学教授)

皆様、ご参加ください。

◆女性のための相談室開室日

10月 5日(金) 14:00~17:00

10月12日(金) 10:00~13:00

10月19日(金) 14:00~17:00

10月25日(金) 10:00~13:00

学外の女性カウンセラーによる相談室です。

ひとりで悩まず相談してください。

わくわく・ドキドキの5日間

<4日目>

朝から元気に「じゃんけん遊び」で動きまわる子どもたちです。「ゴキブリじゃんけん」では、3回続けて勝たないと「人間」に「進化」できません。必死になってじゃんけんをする子どもたちでした。今日は、午後からの太陽観測に備えて、午前中に授業がありました。流星群やスペースシャトル、月、太陽、銀河の様子をスクリーンで見ました。特に流星群の話や太陽の動画は、子どもたちの興味を引いたようです。

昼食を食べて、花山天文台に出発しました。宇宙構造の3Dグラフィックを使った説明を聞き、太陽用の望遠鏡、虹を作る機械を見学しました。曇り空で太陽の黒点観察はできませんでしたが、先生方の説明を聞きながらあちこちで歓声を上げていました。おやつを食べて、元気をつけた後は、飛ばせる紙飛行機・スペースシャトルを作り、輪ゴムをつけて飛ばして遊びました。



<5日目>

今日のグループ名は恐竜の名前をつけるとあって、口ぐちに恐竜の名前を言っています。ゴキブリザウルス？なんていたかな？さて、昨日天文台で作成した紙飛行機を思いだし、スペースシャトルの「はじき絵」を書きました。クレパスで塗った上から絵の具を塗るので、クレパスの部分だけ絵の具がはじかれて、きれいな模様になりました。終われば、早速、自由に遊び始めます。

昼食後、博物館へ。岩崎先生をはじめ、研究者の方々が迎えてくださいました。展示室を見て回った後、化石・骨格・生きた爬虫類などの体験コーナーへ。はじめはおとなしく触っていましたが、骨格どうしを組み合わせさせて新種の生物を作りだす子どもたちでした。



センター支援員も、子どもたちとともにわくわく・ドキドキさせてもらった5日間でした。

<反省会とアンケート>

最終日には、保護者のご協力を得て、反省会を持ちました。また、応募いただいた方には、アンケート回答のご協力いただきましたので、その概要を報告します。

(1) アンケート回答より

①参加の動機は？

- ・子どもにサイエンスへの興味を持たせたい
- ・大学で行われている研究の一端に触れさせたい
- ・内容がおもしろそうで、子どもの送迎もしやすい
- ・利用中の学童保育とは違った経験をさせたい

②開催時期

- ・ちょうどよい(62%)
- ・もっと早い方がよい(38%)

③開催期間

- ・ちょうどよい(56%)
 - ・もっと長い方がよい(44%)
- 10日間ぐらいがよい。応募者多数により参加できない方もあったため、5日間を2期にわけて実施してはどうかという意見もありました。

④その他、ご意見・ご感想など

- ・今後も継続してほしい
- ・親の夏休み取得時期やその他の行事との関連があるため、参加者の確定をもう少し早くしてほしい
- ・小学校高学年向けのスクールも開催してほしい

(2) 反省会より

- ・子どもは毎日、帰り道と帰ってから1～2時間ぐらいスクールでの体験を話していた
- ・いつもは、子どもを学童に入ればなしと感じていたので、このような企画がありがたかった

・イベントが多いことはありがたいが、午前中のプログラムで完成しなかった工作等を他の時間にやるなど、時間的なゆとりを持たせてはどうか

・この時期は、親子で夏休みの工作などの宿題の追い上げをしているころなので、工作の作品がいくつもできたことはありがたい

・参加者としてだけでなく、科学教室などのプログラムに関わり、協力していきたい

・オープンスクールなど1日のみのイベントで、小学校低学年対象のものはほとんどないので、学内者向けのプログラムとして定着させてほしい

・学童保育は、それぞれの地域で取り組みがなされていて、京大での実施の必要性は低いが、今回の取り組みがパイロットプログラムなら、今後も、学校が休みの期間にサイエンススクール等の取組みを充実し、続けてほしい

・経費面で困難なら、有料での取り組みを検討し、サイエンススクールを続けてほしい

(スクール担当：育児介護支援事業WG)



女性研究者支援センター改修設計顛末記

工学研究科 社会人大学院生博士課程

一級建築士

赤崎盛久

昨年12月6日大学から帰り夕食をとって、いつものようにパソコンに向かってしていると、助教の安枝さんから電話がかかってきた。用件はこうだった。「医学部構内にある旧官舎（橘町官舎）を女性研究者支援センター（以下、センター）に改修するにあたって高田・神吉研究室として改修設計を行うので協力して欲しい。については明朝9：30本部棟2階にある女性研究者支援センターの事務室に来て欲しい。」とのことであった。用件を十分飲み込めないまま翌朝、安枝助教と本部棟前で待ち合わせ、2階のセンターの事務室に行くと、登谷先生と斉藤先生がおられ改修プランの検討が始まった。センターの先生方の話では以前から提出していた橘町官舎を改修してセンターとして使用するという提案が、突然GOサインが出て年度内に改修工事を済ませるとのことで、急遽スタートということだった。なにしろ時間がない。

施工チームは施設環境部施設整備課の福田さん、林さん、カクサン建工の加畑監督。設計チームは神吉准教授、安枝助教のマネージメントのもと、ワーキンググループとして調査及びドラフト（設計図書作成）担当の郭さん（以下クオさん）と僕。クオさんは日本統治時代に台湾に建てられた官舎（日式住宅）を研究している台湾からの留学生で、彼女にはもってこいのテーマだ。そのクオさんが、日本の建築学界に大きな足跡を残されたわが研究室のルーツとも言うべき故西山卯三名誉教授の随筆「住み方の記」（1978年）に、この建物のプランが掲載されていると見つけてきた。記事を読むと、西山先生が戦中戦後の一時期をこの南隣の官舎ですごされた時のことが「大学官舎」の章につづられている。これもなにかの縁か？

この改修での大きな問題の一つは期間がないこと、もう一つは現在の建物がどんな構造になっていて、どれほどの耐力をもっているかが未知数だということだ。これは神吉先生から西澤英和先生（当時京大講師、現関西大学准教授）という伝統建築の構造補強の専門家をお願いしてもらい、年末のあわただしい12月23日土曜日に概略調査していただいた。西澤先生のご指導は「現在の建物はバランスを取って構造計画されているから、できるだけ柱や壁に手を加えないで改修するように。その方が補強工事に無駄な費用をかけず済む」とのことであつた。これでプランの方針は決まった。それまではこの壁やあの柱を外し、こちらを補強しての切った貼ったでプランしていたが、出来るだけ現在の構造を生かしてということになった。現在相談室の中に柱があるのはそのためである。

そうこうする内に年が明け、1月7日神吉先生から「クライアントへの対応が遅れるのは今後にかけてまずい気がします。なんとか電子会議で乗り切りましょう」と図面を書く時間がないとぐずる僕へ叱咤のメールが来た。本来、建築の設計と言うのは設計者が施主の要望を聞いて構想案を練り、図面化し、その図面で見積りを施工業

者から取り、施工業者を決定し、図面をもとに施主と請負い業者が工事請負契約を締結し、しかる後に着工するというのが本来のステップだ。しかし、図面を書く時間がな



い。もっとも、僕等設計業界仲間では「口」で設計するというやり方がある。つまり図面を書く時間がないので口で設計意図を伝えるのだ。だがその場合は何の記録もないから証拠が残らない。聞き違いもあり、えてしてトラブルの原因になる。しかし、考えてみると電子会議は履歴が残る、アドレスをグループ化しておけば一度にメンバー全員に連絡できる、画像や資料があれば添付すればよい。というわけで最低限の設計図書として平面図、立面図、断面図、照明コンセント位置図、照明器具リスト、仕上・仕様表等を作成し、あとは電子会議ということになった。

結果的には、この改修工事について、下表の通り200通近いメールが夜昼なく飛びかったのだ。仕様書作成と調整にあげくれた1月中旬は設計チーム内のメールはピークとなり、それ以降はセンターと施工側とのメールが多くなっているのは当然である。というわけで、改修工事設計の顛末は表の設計作業欄の通りだ。しかし、図面もなしで僕達の設計意図をくみとり短期間でよく工事をしていただいたカクサン建工の加畑監督、それを調整いただいた施設環境部の福田さん、林さんにはこの紙面を借りて感謝を申し上げたい。

ところで、先の西山先生の「大学官舎」の章の最後に、官舎に住まわれていた子育て時代（当時は3人、のちに5人の子育て）のことを振り返り、次のように書かれている。「今になって考えてみるとその時どうして子供たちを育てつつ日々をすごし、しのいだのか、妻も夢中だったという。……妻がずっと家にいてさえそうである。まして（女性が）働きにでねばならぬとすればどうということになるのか。私は、家族成長のこうした時期にこそ家事労働の軽減—それは保育所とか託児所、社会的サービス施設による社会化……が大きく考えられるべきだと思う。」さすが西山先生、女性の職場進出がまだまだまらない30年前に、既に女性研究者支援センターのような施設の必要性を説かれていたのだ。

メール会議内訳				
	設計 チーム 研究室内	センター 及び施工 チーム	計	設計作業
12月	上旬	1	1	1 改修打合せスタート
	中旬	8	1	9 改修方針協議調整
	下旬	3	3	3 プランおよび構造検討（西澤先生）
1月	上旬	7	2	9 プラン、仕様・仕上げ概略決定
	中旬	26	10	36 プラン、仕様詳細検討
	下旬	14	8	22 照明器具、仕上げ詳細検討、空調仕様調整
2月	上旬	2	3	5 詳細構造補強仕様決定（西澤先生）
	中旬	3	1	4 外構設計、屋外照明検討
	下旬	5	17	22 照明コンセント調整、玄関ドア設計、ガラス調整
3月	上旬	3	18	21 玄関ドア色、タイル衛生器具等の陶器類色決定
	中旬	8	6	14 内外仕上げ色決定、塀、アプローチ等外構設計
	下旬	3	3	6 屋外水栓等設備調整
4月	上旬	2	20	22 外構ルーバー詳細設計、屋外設備詳細設計
	中旬	2	5	7 造園ツメ
	下旬	0	0	
計		87	94	181

データで見る女性の躍進(5)

広報事業ワーキンググループ主査
文学研究科教授 伊藤公雄

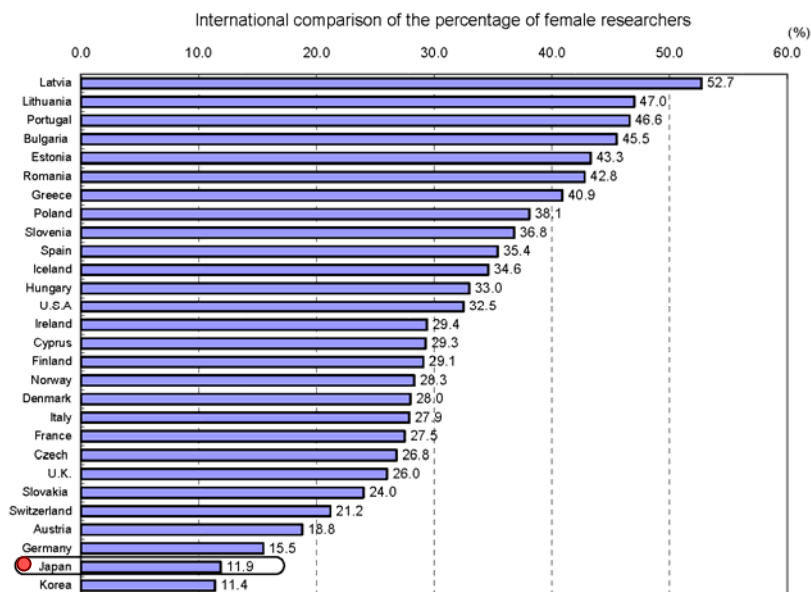
女性研究者支援センターでは、11月7日(水)、アメリカ合衆国女性科学者の会・会長である Phoebe S. Leboy 教授を招いて、女性研究者の現状と課題をめぐる国際シンポジウムを開催する予定である。

このシンポジウムに先立って、ここでちょっと、日本社会の女性研究者のおかれている状況について国際比較のデータを見ておいていただこうと思う。図は、昨年(2006年)発表された「女性研究者割合についての国際比較」である。ごらんになればすぐわかるように、日本の女性研究者割合は、他国と比較して極端に低い。このデータでは、韓国に次いでビリから2番目である(実は、ごく最近発表された本年度のデータでは、韓国にも抜かれたそうである)。

逆に、日本の女性研究者の多くが大学所属(とはいっても、日本の大学教員の女性比率はOECD加盟国中最低で、加盟国の平均の半分にも届かず、日本の次に低い韓国からも10%以上はなされているのだが)であり、企業での女性研究者が少ないというデータもある。総務省の「科学技術研究調査報告」(2006)によれば、男性の研究者の6割が企業に所属し、大学所属は3割に過ぎないのに比して、女性研究者の6割が大学所属(企業所属は3割)であるという。大学における女性研究者の所属分野については、(栄養学を含む医学・歯学以外の)保健

分野ではその半数を女性が占めているが、工学分野では7%弱、理学・農学でも1割台でしかない。

日本政府は、「大学院修士課程のほぼ3割が女性だから、今後は期待できるだろう」と楽観しているようだが、どうだろう(この3割の女性すべてが研究者になっても、国際水準という点で、高いレベルとはとてもいえないのだから)。数字を見る限り、女性研究者拡大に向けたより具体的で有効性のある本格的対応が、日本の学問研究の全領域で問われているのは間違いないところだろう。



White Paper on Gender Equality 2007 Outline Cabinet Office June 2007 より

病児保育室の利用状況

医学部附属病院内に病児保育室を開室し、7カ月が過ぎました。その利用状況や利用者から寄せられた声を報告します。

8月末時点の登録者数は、116人で、8月の平均利用者は、3.1人/日でした。

男女にかかわらず、京都大学の教職員、学生ならどなたでも利用できますので、子どもが病気になった時に慌てることのないよう、事前に登録されることをお勧めします。

Center for Women Researchers

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町

電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
Email: w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP: <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>

＜病児保育室利用者の声＞

- 子どもが病気の時、職場の近くに病児保育室があるので、昼休みなどに様子を見に行くことができる。
- 生き物(動物・植物)を対象とした実験をしている場合、1日たりとも実験を中断することができず、病児保育があることで中断しなくてすむ。もし、中断しなければならない場合は、実験を最初からやり直さなければならぬので、時間的にはいうまでもなく、予算的にも当然苦しくなってくる。
- 大学の研究者は、企業と違って一人で研究している場合が多いので、他の人に代わってもらうことができない。
- 特別な技能を必要とする授業を持っている場合、休講や代替を頼んだりすることができない。
- 朝、子どもの調子が少し悪い時は、保育園から子どもを連れて帰るように途中でいつ呼び出されるかひやひやしながら仕事をしていたが、病児保育室ができてからはそのような心理的圧迫がなくなり、余裕を持って働くことができる。

